

慶應義塾大学教養研究センターの実験授業 —「声プロジェクト」と「新しい文学教育」—

横山千晶¹
慶應義塾大学

The Experimental Classes of the Keio University Research Center for the Liberal Arts: “Voice Project” and “New Literary Education”

Chiaki YOKOYAMA
Keio University

座学中心の大学教育の中では、身体存在は希薄になりがちである。一方スポーツや芸術の世界では、身体能力や身体表現が基盤となり、脳科学や医学、および精神医学の領域では身体経験が精神面や思考にどのような影響を与えるのかが活発に議論されている。現在複数の領域で「身体論」が展開され、「身体知」という概念が紹介されているものの、その内容は同領域内ですら多岐に渡り茫洋としている。しかし、領域を超え分散する概念を貫く柱を見出し、教育に応用していくことは、私たちが学んだことを試行錯誤し、そこから上がってくる新たな知を伝達するという人智の基本的な営みとして、教育の基本に据えられるべきであろう。そのようなミッションを掲げ、慶應義塾大学教養研究センターでは2005年度に「身体知プロジェクト」を発足させた。この研究プロジェクトでは、研究会での理論構築と、理論を試す実践の場としての実験授業を通して、「身体」をキーワードとした初年次からのカリキュラム・モデルの構築を目指している。この「身体知プロジェクト」の一環として2007年度から実施されているものが「声プロジェクト」である。このサブ・プロジェクトは「身体知プロジェクト」で展開される研究および理論構築と両輪をなす実践の場であり、またその結果が再び理論構築にフィードバックされていくという役割を担っている。同時に現行の試みを見直すことも重要である。現在大学のカリキュラムの中ではすでに、フィールドワークによる調査や自然科学の実験など、体感を通じて理解を促す試みが、複数の場で行われている。これらの「体感」の重要性を教える側の意識上に押し上げ、実践を通じた知見をもとに、それぞれの教授法をほかの領域でも応用できるかどうかを議論しあう場も同時に必要となろう。本報告では慶應義塾大学教養研究センターの最近の教育事例を、「声プロジェクト」で展開された「文学教育」を中心に紹介するものである。

[キーワード：身体知、体感、座学との関係、文学教育]

1. 教育現場での「身体」の意味

(1) 「キレル」身体

昨今哲学および芸術的な意味を超えて、「身体論」や「身体知」という言葉がいろいろな場面で語られるようになってきている。それらの言葉の呈する複雑さは、教育の場におけるこの新たな知の定義の必要性を突きつけると同時に、座学に限定されない知のあり方が求められていることを物語っている。

では「身体知」とはいったいどのような「知」であるのか。そしてどうして今この「知」のあり方を教育現場で議論しなくてはならないのか。自分を知り、他者と交流する際、私たちは書かれた「言語」と共に身体を使う。同時に知を獲得し、理解し、伝える作業はすべて身体を経由し

¹ 慶應義塾大学法学部／慶應義塾大学教養研究センター chacky@a8.keio.jp

ている。つまり「身体知」は言語知・社会知の基礎ともいえる。またそれは、単に肉体としての身体のみならず、人間という存在をホリスティックにとらえる概念であり、当然ながら精神性や感情論もそこに含まれることになる。

このような身体に対する議論の背景には、時代の突きつける一つの危機感があることは否めない。その危機感とはテクノロジーの波の中で希薄化する身体存在やコントロール不可能な精神・感情・不安といった諸現象の生み出すものであり、教育現場で切実に意識されているものでもある。このコントロール不能な状態を一般に「キレル」と呼ぶことから、ここで身体はすでに思考回路が切れた機械と化していることになり、精神・感情・知性が生身の身体から乖離した状態にしばしば私たちが陥ってしまうことが認識されている。同時に IT リテラシーの普及により現代のコミュニケーションのあり方は大きく変わったのみではない。身体を欠いたコミュニケーションは、同時にいくつものアイデンティティを作り上げることを可能とし、ヴァーチャルなコミュニケーション空間の中で、人々はいくつもの場に同時に存在しながら、本来の意味での居場所を失いつつある。社会の中での自分の位置がわからなくなるということは、存在そのものを失うことに等しい。このような危機感に触発されながら、さまざまな領域の専門家や研究者たちが「身体」の意味と重要性を追求し、強調している。

(2) 教育現場での連携

一方、論理的思考力は感性や身体性と切り離すことはできない。考えることは、身体に触発され身体と不可分の全人的な行為以外の何ものでもないからだ。さらに、身体は、フーコー以降の現代思想でも、脳科学や認知科学でも、芸術や臨床心理学の領域でも、異なる枠組みで研究・実践が進められてきている。それぞれの領域で目覚ましい研究が展開されていることは事実だが、今まではこれらの研究領域での相互間交渉は積極的に行われてこなかった。これらの成果を研究のみならず、まさに教育現場での実践を通して統合することには大きな意味があろう。つまり教育に関わるものが、人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れないという事実を明確に再認識し、意識的に相互の壁を突き崩して協力し、統合的な研究と実践を目指すことは、この身体と論理的な思考がまさに「切断され」ることが問題視される現代の状況に、大きなインパクトを与えることになるからだ。またそのような身体への揺さぶりは、高校までは受身の学習になじんできた大学初年次の学生に適用することで、大きな効果を発揮するだろう。

そのためには新たな授業形態を模索する必要がある。現状を見ると、すでにさまざまな大学では学問の各領域で体験型の授業を取り入れている。たとえば調査にフィールドワークを必修とした少人数授業や、インターンシップのような体験型実務教育が徐々に広がりつつあり、大きな成果を挙げている。また、地域社会と連携して、キャンパスという学びの空間を地域そのものへと広げていく社会貢献・地域連携型の授業も盛んに行われている。自然科学系統の授業では、講義と実験がペアとなって行われているものも多い。現に筆者が務める慶應義塾大学では、文系の学生にも積極的に実験授業が提供されてきており、文系の学生に対する理系教育の目覚ましい成果を挙げている。これらの新しい教育の試みを推進すると同時に、複数の効果的な授業形態の可能性を探ってゆくことが、大学教育の未来のために不可欠となる。その過程では、領域を超えた体験型教育のメソッドを共有し、互いに応用できる部分を見出すことも可能となるだろう。

2. 慶應義塾大学教養研究センター基盤研究「身体知プロジェクト」と「声を考えるプロジェクト」

(1) 「身体知プロジェクト」の立ち上げと教育現場で身体を考える3つの軸

教養研究センターでは、そのような見地のもとに、21世紀の中で私たちが再建もしくは発見すべき「身体」とは何であり、それを一つの「知」に組み入れた上で次世代に伝えていくにはどのようにしたらよいかを教職一体となって考える場として、2005年5月に基盤研究「身体知プロジェクト」を立ち上げた。具体的には以下の手順で身体知教育の理論化を試み、広く外部に発信することをその目標として活動している。

- 1) さまざまな「身体知」のあり方の過去と現状を見据える
- 2) 「身体知」教育の実践の場を調査し、意見交換を行う
- 3) 実験授業を通じて「身体知」教育の意義と方法を探る
- 4) 実践の成果を踏まえて新たな「身体知」および「身体知教育」を理論化する
- 5) 「身体知教育」のカリキュラム・モデルを作り、広く発信する

以上からも明らかなように、プロジェクトは調査を通じた研究と理論構築を行いつつ、実践を通してそれらの理論の実効性を確認するという研究と実践の両輪の元に動いている。実践で確認されたことを再び研究へと還元し、新たな理論と具体的なカリキュラム・モデルを作成し、発信していくのである。

この一連の活動の中で、私たちが身体知の基本軸として設定したのは以下の3点である。

1) 言語と非言語

人間は言語を介して他者と交流し、知を伝達する。しかしながら、ボディ・ランゲージに象徴されるだけでなく、人間は、思考においてもコミュニケーションにおいても、非言語的であり、このような言語性と非言語性の並存と対立の矛盾への洞察が、知性を考える上で不可欠である。

2) 視覚と非視覚

人間は視覚が他の感覚の優位に立つ動物である。パワーポイントなどのテクノロジーにより、授業においてもヴィジュアル化が促進され、人間の視覚優位性を活用した教育が活発である。同時にこれらの視聴覚資料を使つての授業実践を学生側も強く希望している。しかし、人間の原始的な根幹部分は非視覚的一聴覚、触覚、嗅覚、味覚などであり、これらの「五感」を駆使しながら、人々は豊かな文化と伝統を構築し伝えてきた。テクノロジーの発達に刺激された視覚情報の増大は、かえって人間の感性と思考のバランスを崩す危険性をもはらんでいる。よって、言語の場合と同様、視覚と非視覚の並存と対立の矛盾を考察しなくてはならない。

3) 「場」を考える

1) と 2) の軸は、自然科学そして精神分析の成果に支持された理念的区分と言えるが、第3の軸はより教育の場での実践的なものである。大人数での知識伝達型の実践を考えるか、少人数での親密さと双方向性を重視するか、という問題は、カリキュラム構成上の絶え間ない論点を提供する。もちろん、双方のバランスが大切だが、これを、人と人の距離の問題、コミュニケーションのあり方の問題などを含めた、実存としての「場」の軸として捉えることが重要である。

(2) 「声を考えるプロジェクト」の立ち上げ

教養研究センターでは2007年度、これらの研究と実践のさまざまな取り組みを統合させ、教育の現場でもっとも重要と思われる「発信する主体」として、今ここにいる自分のあり方を、「声」を切り口に考察するサブ・プロジェクト、「声を考えるプロジェクト」を立ち上げた。

ここでは(1)であげた3つの基軸を意識している。非視覚的である「声」は、決して意味をなす音声伝達だけに終始するものではない。それは身体存在そのものを基盤としており、「場」と空間を介して伝えられるコミュニケーション・ツールでもある。同時に人間の聴覚に訴える「声」は、言語以外の「音」や「メロディ」を通してコミュニケーションを図る非常に情緒的な伝達ツールでもある。つまり非言語的な要素を多分に含んでいる。現実では私たちはそれらすべてを駆使して自己表現を行っている。その新しい形の自己表現を促すために、言語で発信されたものを「場」を共有しながら五感を使って受け止め、解釈し、再び視覚化したり音声化したりして自らの身体を通して表現しなおす教育のあり方を「声を考えるプロジェクト」では実験授業を通して模索している。以下、その実験授業の事例報告を行いたい。

3. 新しい文学教育の実験授業

(1) 2007年度『チャタレー夫人の恋人』を身体で読む

2で挙げた3つの軸から、既存の座学中心の授業を見直してみることを「声を考えるプロジェクト」では目指している。その一つが文学作品の解釈である。高校のみならず、大学においても従来の文学の授業は、主として作家や作品の背景について講義が行われるタイプのもので、より小規模のクラスであっても、学生たちのディスカッションや発表を通して新たな解釈の可能性を探るという形態が主流である。また、おそらく多くの学生にとって、読書とは多かれ少なかれ、個人と文学作品との1対1の対話の中で行われる行為である。

私たちの主眼は、このような文学作品との対峙、および従来の授業のあり方を、大学初年次において根底から覆すことにある。具体的には授業から離れて、身体を用いた体験・参加型の文学授業を実施することで、大教室の授業や従来の言語教育で足りないところを補うとともに、普段使わない感覚を研ぎ澄まし駆使することで、新しい文学の読み方と文学教育の形を探ることにある。つまり、上記の第1の軸、言語的アプローチと非言語的アプローチを交流させて、「語力」の発達と身体性・感性の気づきと成長を促すと同時に、より密なコミュニケーションの場を作り出すことで、第3の軸の意義をも考察することである。

こうして従来の言語中心の文学理解から、体を通した新しい文学理解が導き出される。しかし、そこでとどまることなく、文学の創造過程に自らが参入するところまで踏み込むことをこの教育課程の中に組み入れた。つまり新たな解釈に基づいた創作活動である。こうして言語と身体をめぐる一つのサイクルを作り上げることで、統合的な教育モデルが構築されるであろう。

2007年度は8月6日から11日までの6日間、およそ18時間を費やして授業を展開した。題材としたのはD.H.ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』(武藤浩史訳、ちくま文庫、2004年)である。本作品で描かれるさまざまなぶつかり合いと摩擦は、社会と個人、男と女、階級同士という異なった形態を取って現われる。作品が書かれた時代背景を考慮しながらも、その時代特有の価値観の衝突が現代に生きる私たちにも十分に通じるという見解のもと、この実験授業では、「触れ合い」の重要さへと参加者の認識を導いた。この目標を達成するために、講師には臨床心理学者、朗読家、現代舞踊家、講談師など、異なった分野の専門家を招いて、ワークショップ形式の授業を行った。また、朗読や身体ワークショップを経験する過程で見出された新たな解釈に基づき、参加者は再び『チャタレー夫人の恋人』に想を得たオリジナルな言語創作活動を行い、最終日には講師を招いて発表会を開催した。この授業の圧倒的な成功は最終日にとったアンケート調査か

らも明らかで、参加者の一人ひとりが非常に肯定的な反応を示してくれた。

詳細はすでに刊行されている報告書（武藤・横山，2008）に譲るが、2007年度に開催した実験授業を成功に導いたのは以下の諸点であると思われる。まず参加者の年齢である。今回は大学1年生のみならず、大学2, 3, 4年生、大学院生、教員の参加もあった。それに加え、たまたま時期が通信教育部の夏季スクーリングの時期と重なっていたために、30代から60代の通信教育部生の参加もあった。特にこれらの通信教育部生との交流は初年次の学生にとって多大な教育効果があった。大学初年次で人生経験豊かな学習者と交流することは、多様な文学解釈へとつながる扉となったからである。同時に今回の授業のコーディネーターはテキストの翻訳者であった。文学の翻訳書は、それ自体が綿密な研究に基づいた成果であると同時に、すでに一つの解釈である。教員は自らの研究の成果を一方通行にならないやり方で、自分が体験した感情のうねりを学生に追体験させながら教育に結びつけることができるのみならず、学生の力を借りて、自らの研究成果を客観視し新たな研究のステップを形成することができるのである。つまり研究と教育を見事に連結させながら、研究の最先端に学生と共に立つことが可能になるのである。

(2) 2008年度『ジョン・ボールの夢』を体感する」

2007年度の成果に基づき2008年度に取り組んだのはウィリアム・モリス作の『ジョン・ボールの夢』である。今回は「声と身体と歴史文化の接点を探る教育の実践」と銘打って、授業を展開した。その趣旨については以下、学生用の募集要項からそのまま引用したいと思う。

(授業の趣旨)

慶應義塾大学教養研究センターでは、時代に必要とされる知を構築し、伝達するために理論研究とその実践を行っています。文字と視覚による情報の享受が一般化している昨今、再び叫ばれているのが教育の場における身体の復権です。しかしともすれば座学中心、マスプロ教育が主体となる大学の教室に、どのようにしてこの身体性を導入していけばよいのでしょうか。この試みの一つが「声を考えるプロジェクト」です。

その一環として行われる実験授業「新しい文学教育」では、主として作家や作品の背景についての講義から成る従来の文学の授業から離れて、言語と身体を用いた体験・参加型の文学授業を実施することで、大教室の授業で足りないところを補うとともに、時代にふさわしい文学教育の形を探ることが目的です。言語的アプローチと非言語的アプローチを交流させて、「語力」と身体性・感性の相互的陶冶を目指すことで、従来の言語中心の文学理解から、体を通した新しい文学理解へと導くのみならず、文学の構築過程に自らが参加するところまで踏み込んでいけるでしょう。同時に夏休みに集中的なワークショップの形式を取ることで、参加者間の交流を深め、共に学びあう環境を作り出すこともその目的の一つです。

(授業の内容)

今回取り上げる『ジョン・ボールの夢』（1886年～1887年雑誌連載，1888年出版）はウィリアム・モリスの後期ロマンスの1作品として『ユートピアだより』と並ぶユートピア小説です。同時にモリスが愛して止まらなかった中世を十分に研究し尽くした、歴史小説でもあります。

しかし一般の歴史小説と一線を画しているのは、以下の2点です。

まずモリスは自らの愛した中世の時代、しかもちょうど歴史が大きく動いていく中世の動乱の時代を、大きな歴史的な事象をテーマとしつつも、あくまで人々の日常生活の視点からとらえました。美しい自然、澄んだ空気の中に響く森羅万象の物音、話すことそのもの、語りかけ、歌、身体への意識、そして飲みかつ食べること。そういったごく普通の生活の中にモリスはもっとも重要な社会的価値を見出していました。幾分モリスの想像の所産であるとはいえ、モリスにとっての中世の魅力は、まず人々の生活そのものでした。細部から全体を見ていくという視点（つまり生活の細部から社会構造の全体を予測する）、そして主体を通して他者を理解する（過去へさかのぼり、そこで生活するという設定自身が感情移入につながっています）その過程は19世紀特有の歴史観であり、現代の学問分野、文化研究にも大きな影響を与えているのです。その歴史観の構築にモリスも一役買っていたといえましょう。『ジョン・ボールの夢』は歴史的なダイナミズムという大きな流れと、その礎石としての基本的な日々の営みをしっかりとつないで見せてくれます。

第2点は、この物語は社会主義小説であるということです。上で述べた歴史観を基にして、モリスは独自の社会主義を構築していきました。それは、はからずもマルクスがその社会主義思想構築の初期に提示した理想と響きあいます。まず自然ありき。そしてその中で協力し合って生きていく人々がいる。社会はそこから始まっているのです。理論に基づく社会思想の中にモリスは今一度身体性をもたらしやうとしました。彼にとっての理想社会は、階級のない、人々が自分たちのできることでつながりあい、支えあう社会です。（たとえばこの物語の中ではモリスと思わしき主人公は、中世のヨーマンのような身体能力はまったく欠いているものの、バラッドや物語の語り手としては中世の人々に勝るとも劣りません。）

そのキーワードがこの小説の中でジョン・ボールが何度も口にする「仲間との連帯（フェローシップ）」です。

今回の実験授業では、モリスが読者と、そして同時代の人々と、分かち合おうとしたこの「中世」の世界を、「語りかけること、語り合うこと」、「歌うこと・謡うこと」、「体を動かすこと」、「食べること」、「感じること」そして最後に「創作すること」を通して体験してみたいと思います。講師人もその道の一流の方々をお呼びしています。一緒にモリスの言語に命を吹き込んでみましょう。

この企画案に応じて28名の応募があった。そのうち大学1年生は7名であるが、それ以外にも昨年度の参加者や去年に引き続き通信教育課程の学生からの応募があった。授業は8月7日（木）から8月13日（水）[8月10日（日）は休み]の6日間に行われ、10時から11時半、11時45分から13時15分の日90分2コマで、慶應義塾大学日吉キャンパス内で行われた。

今回のコーディネーターは本作品の翻訳者である筆者が務めた。テキスト（『ジョン・ボールの夢』[横山千晶訳、晶文社、2000年]）は授業前に読み込んでおくことを条件とし、初日の1時間目にコーディネーターからこの授業の趣旨とスケジュールを説明し、2時間目は参加者による読後感想の発表とディスカッションを行った。その後のスケジュールは以下のとおりである。

2日目1, 2時間目

講師：松井周（劇団青年団，劇作家・俳優・演出家）演劇ワークショップ その1

3日目1，2時間目

講師：坂口芳貞（劇団文学座，桜美林大学教授，俳優・声優・演出家）

演劇ワークショップ その2

4日目1時間目 講師：佐藤仁美（放送大学准教授）連歌作りと協同創作

2時間目 創作

5日目1時間目 講師：永田平八（リュート奏者，作曲家）バラッドのワークショップ

2時間目 創作

6日目1時間目 講師：川西大介（慶應義塾大学体育研究所講師）アーチェリー体験

2時間目以降 創作発表会兼振り返り

(3) 『ジョン・ボールの夢』は体感できたか

2008年度の実験授業の目標は二つある。まず、「体感」というキーワードのもとに「歴史的な考察」に身体から入ることである。そして「仲間との連帯」というキーワードのもとに、「アカデミック・コミュニティ」を形成することである。

「体感」については演劇的な要素を取り入れると同時に、音楽や体育の要素を取り入れた。まず演劇的要素については二つの視点から取り組んだ。初日の松井氏のワークショップでは、『ジョン・ボールの夢』の第10章から第12章中で展開される14世紀の人物と19世紀から来た旅人との対話を書き換え演ずることで、「会話」を通してテキストの内容を自分の身体に落とし込んでいくことを目指した。それに対し、2日目の坂口氏のワークショップでは身体ワークショップを経たあと、テキストの第4章で展開されるジョン・ボールの演説に焦点を絞った。ここでは言葉と声の力とその訴えかける力について個々が考え、演ずる場を設定した。

続く歴史的な考察としての「歌のワークショップ」では、言語表現としての歌詞に注目した。本来「読む」のではなく「歌（謡）い」「聴く」対象となる歌詞がいかにかに文学的な表現とは異なる創作を必要とするのかを、協同の連歌作りと、ウィリアム・モリスが作った歌を日本語に置き換えることで体感した。またテキスト中の歌については、実際に当時のバラッドに近いメロディを音楽家の永田平八氏に作曲していただき、モリスの作詞を日英二つの歌にして参加者全員で謡った。同時に最終日には本作品の中に頻出する長弓を体験するために、慶應義塾大学体育会洋弓部の援助を受けてアーチェリーを行った。その際に、テキストの中で展開される十字弓・弩と長弓の違いにも講師の方に触れていただいた。百年戦争でフランス軍が使った十字弓は殺傷力の高い引き金式の武器であり、いわゆるピストルなどの「機械仕掛け」の武器の原型である。つまり研ぎ澄まされた身体能力こそを必要とするイングランドの長弓とはまったく概念が異なっている。このような武器の描写にも、人間の五感と身体能力こそを重視するモリスの意思を読み取ってもらおうと、当日は担当講師の手製長弓と現在の洋弓の二つを体験した。のちのアンケートを見ると、意外にもこのアーチェリー実習が印象深いものであったことがわかる。文字による表現を視覚化することが容易になっただけでなく、場面ごとの雰囲気をもより深く感じられるようになったという意見が寄せられたほか、弓を引き、矢を射るときの振動を経験することで、作品の主人公が、戦のさなかに感じた恐怖心を身をもって理解することができた、と答える学生もいた。

2007年度の成果とあわせて今年も特徴的だったのは、学生たちの創作活動の到達点の高さである。去年行った講談を応用して、ワット・タイラーの乱の一幕を講談仕立てで演じた学生は、モ

リスが本作品の中で幾度となく言及する口承文学を実践して見せたことになる。また、松井周氏が行った戯曲形式での共同制作の経験をもとに、参加者は積極的に演劇仕立ての創作活動を行い、しかも作者自らが出演者を指名するなど、世代を超えた「仲間との連帯」が達成された。歌の分野では、バラッドの研究を独自に推し進め、テキストの内容に基づいたバラッドを作るのみならず、このテキストそのものが一つのバラッドの形式を取っているという斬新な解釈をほどこした学生もいたし、「プロテスト・ソング」という歌のジャンルにヒントを得て、モリスの歌をレゲエに翻案して披露した参加者もいた。これらの試みの中では、1年生も創作の楽しさを経験したのみならず、自らが作った言語表現を他人の身体を借りて客観的に見るというまったく新しい創作体験を行ったことになる。総じて授業アンケートでもこの創作活動と発表会に関しては非常に高い評価を得たのみならず、特に初年次の学生に与えたインパクトは高かった。

しかし課題はたくさんある。まず2日目以降は身体を使ったワークショップに重点を絞ったために、初日に行った解釈へともう一度つなげる仕組みが欠けていた。できることならば、身体的な経験と創作を経たあとで、作品解釈がどのように深まっていったのか、そして今回の解釈のキーワードとなる「仲間との連帯」の意味が自分にとってどう変わっていったのかをもう再度議論すべきであっただろう。また各講師とは個別に打ち合わせをし、それぞれの授業が非常に示唆に富むと同時に内容豊かなものであったのだが、それぞれの試みを貫く柱が共有されていなかったことは、コーディネーターの責任といわざるをえない。

同時に正規科目化の問題もある。この種の実験授業は少人数で短期集中的に行うことが最大の特徴である。募集要項にも書いてあるとおりだが、参加者の交流が互いに及ぼす影響の深さは非常に大きい。つまりこのような「アカデミック・コミュニティ」を形成するには、大人数ではなく少人数で、交流にじっくりと時間をかけることが条件である。参加者へのアンケート項目、「このような授業を正規授業化することに対する意見」に対しては、大半の参加者が「ぜひそうしてほしい」、「もっと多くの学生にこのような授業に触れられる機会を与えてほしい」と答えたものの、「正規科目化することでただ、単位を取れることにしてしまったとき、学生のアプローチのし方が積極的でなくなってしまうのは困る」とか、「正規の授業になるとアナーキーさが薄れる気がするので、あくまで確信犯的に、休みの間の実験授業にしてほしい」といった意見も見られた。

ここで聞こえてくるのは、授業外の期間をいかに初年次段階から有効に自立的に過ごすか、そして1年を通してどのようにさまざまな学びの形態を形成していくのか、という学生と大学側の姿勢を問う声である。そのためにはカリキュラムに縛られることなく教員のアイデアを実験的に試行することを、大学は大いに奨励するべきだ。大学教育は常に新しくなっていく。その意味で「アナーキー」な授業がいろいろな場所で花開き、教員同士・学生同士が刺激し合うことが大学教育の豊かな土壌を作り上げる。「学びの場」は学生自身が作っていかなくてはならないという意識を1年のときから持ってほしい。それが「身体知プロジェクト」の最終目標なのである。

参考文献

- 市川 浩 (1975) 『精神としての身体』 勁草書房
市川 浩 (1985) 『<身>の構造—身体論を超えて』 青土社
大津雄一・金井景子 (編著) (2007) 『声の力と国語教育』 学文社
川島隆太・安達忠夫 (2004) 『脳と音読』 講談社

- Serres, Michel. 米山親能 (訳) (1991) 『五感—混合体の哲学』法政大学出版会 (Serres, Michel. (1985) *Les Cinq Sens—Philosophie des Corps Mêlés*. Paris: Éditions Grasset et Fasquelle.)
- 武藤浩史・横山千晶 (2008) 「身体知と新しい文学教育①—レディ・チャタレーとダンスを」『教養論叢』, 128, 368-418
- Lakoff, George., Johnson, Mark. (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.